

挿画

天象地球略解

增山守正纂述

全

特37

431

館籍書會育教本日大			
室		第	
	三		三
一	六	二	五
冊	號	架	函

056193-000-9

特37-431

天象地球略解(挿画)

增山 守正 / 述

M20

CAK-0079



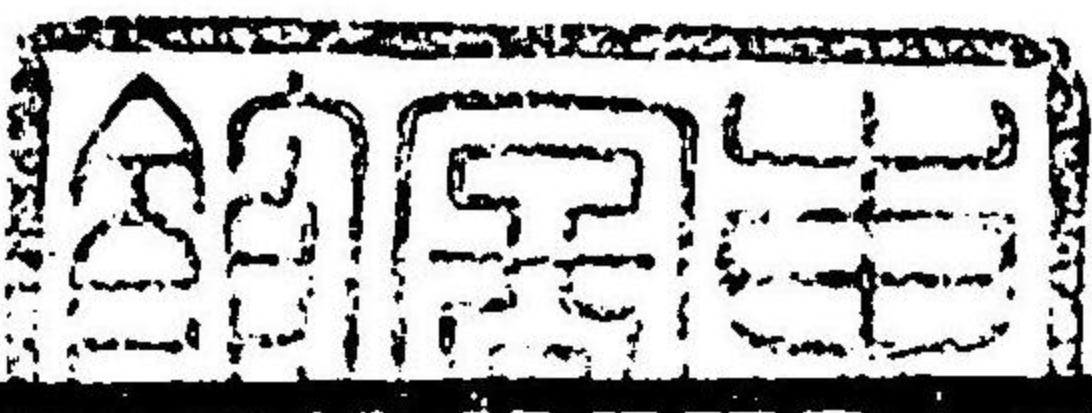
增山守正纂述

插天家地球畧解全

靜香園藏版

序

丹營增山君。携其所纂述天家地球畧解來。求序於余。受而閱之。凡宇宙之間。森羅万象。囊括於其中。而其為文簡單平易。兒童亦可能解。為真是一種之蒙末也。顧君齡已過耳順。健筆縱橫。率之者。亦著他。蘇少傳。謂之夷壇出馬伏波。



序

丹營增山君。携其所纂述。天象地球畧。  
 解來。未序於余。受而閱之。凡宇宙之間。  
 森羅万象。囊括於其中。而其為文。簡單  
 平易。兒童亦可能解。為真是一種之蒙  
 末也。顧君齡已過耳順。健筆縱橫。率之  
 者。亦著他。霖少俸。謂之夷壇。出馬伏波。

亦當非虛稱。茲之讀此書者之所宜鑒  
之。書以換序。

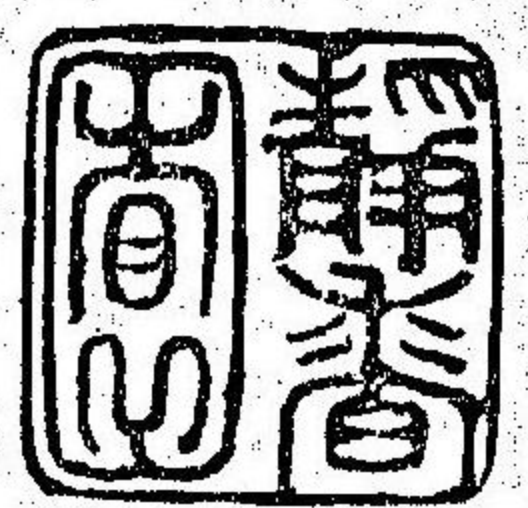
明治二十二年二月 杉浦重剛識



自敘

乾坤之妙。造化之奇。大之日月星辰。爛  
爛麗天。小之霜露雨雪。燦燦播地。其他  
觸目過耳者。悉皆無不奇而妙焉。學者  
其可不畱心耶。余參考近古賢哲之諸  
說。拔其萃以略述夫天象地球之概。更  
加畫圖。編爲一書。名曰插畫天象地球  
略解。以便世之幼童。其亦庶乎行遠登

高之一助云爾。明治十九年十一月。丹波丹蓉增山守正。撰於東京駿臺鈴木街僑居。



挿画 天象地球略解

例言

一 此書ハ天象地文の一斑を説き以て童蒙の開智ハ便むる者あり

一 此編画圖を掲げ小詩と題せり是を童蒙習画の一助とし併せて余の拙詩を一察ハ供を編中里數ハ總て我國の路程ハ從ふ然りと雖も唯博物新編の引用ハ於ける直ハ其原文を抄すると以て彼の國の里程ハ從ふ者とす

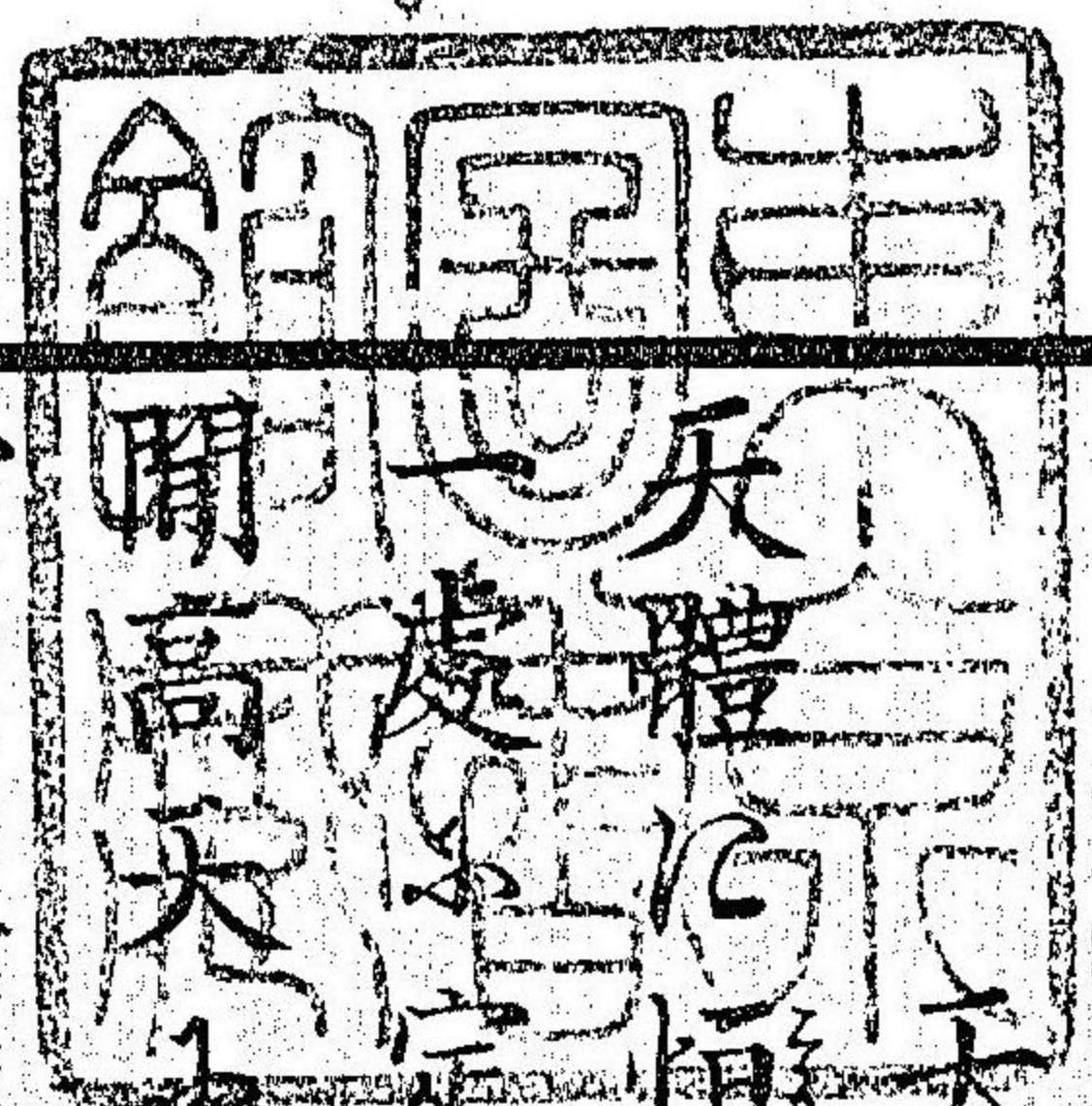
纂述者識

目録

天體總論 日 地球 土星 月 彗星  
 流星 銀河 空氣 風 水 海 雲  
 雨 氷 雪 霰 雹 露 霜 虹 霓 暈  
 電 雷 霧 霞

画挿 天象地球略解

丹波 増山守正纂述



天體總論

天體の恒星遊星衛星の三種あり恒星といふ常小  
 處に定在し曾て其位置を變ぜざる者即ち夜  
 間高天小耿耿たる千星萬宿皆是あり遊星といふ  
 常小恒星の周圍を環行する暗體小して恒星の  
 如く自ら光を放たむ唯他より光を受けて輝け  
 り水星金星及び地球ハ即ち是あり衛星といふ遊  
 星と同トく暗體小して遊星の周圍を繞るもの

即ち月の其一ふり

日

日の恒星の一ふりて常ふ其位置を變ぜば衆星  
と共に大虚ふ在て我太陽系の中心と爲せり其  
大なる地球より一百三十萬倍し地球と相距る  
三千七百二十四萬九千二百五十九里ふり汽車  
の一時ふ能く十二里を行く者ふ乗り天ふ向ひ  
て疾行せば三百六十一年ふりて初て日邊ふ到  
るを得るし其距離の絶遠なる事想ふ處し抑大  
陽の質たる白熾熔爍の體ふりて瓦斯火焰の雰

一大紅輪  
六合輝  
温温煦育  
物皆肥  
千秋萬古  
無燒盡  
即是乾坤  
造化機



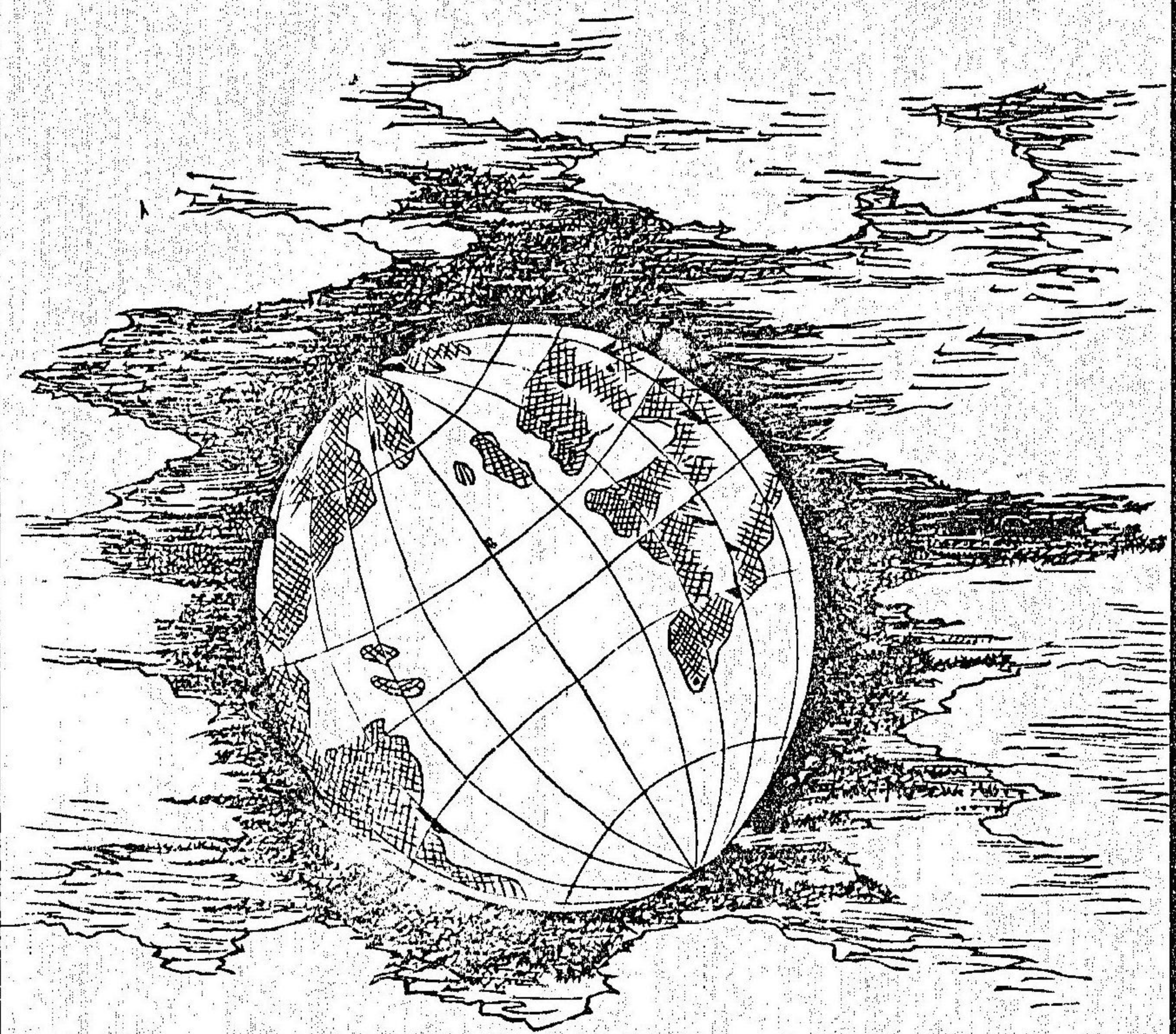
る俾  
世田

圍氣不被包せらま廿五日有餘を以て一自轉し  
引力を以て諸遊星を牽制し其運行を制御し光  
温を放て萬物を化生を其徳の至廣至大なる事  
他小比ぶ厚き者なし世小人の神とし尊崇する  
も故なき小非るあり

地球

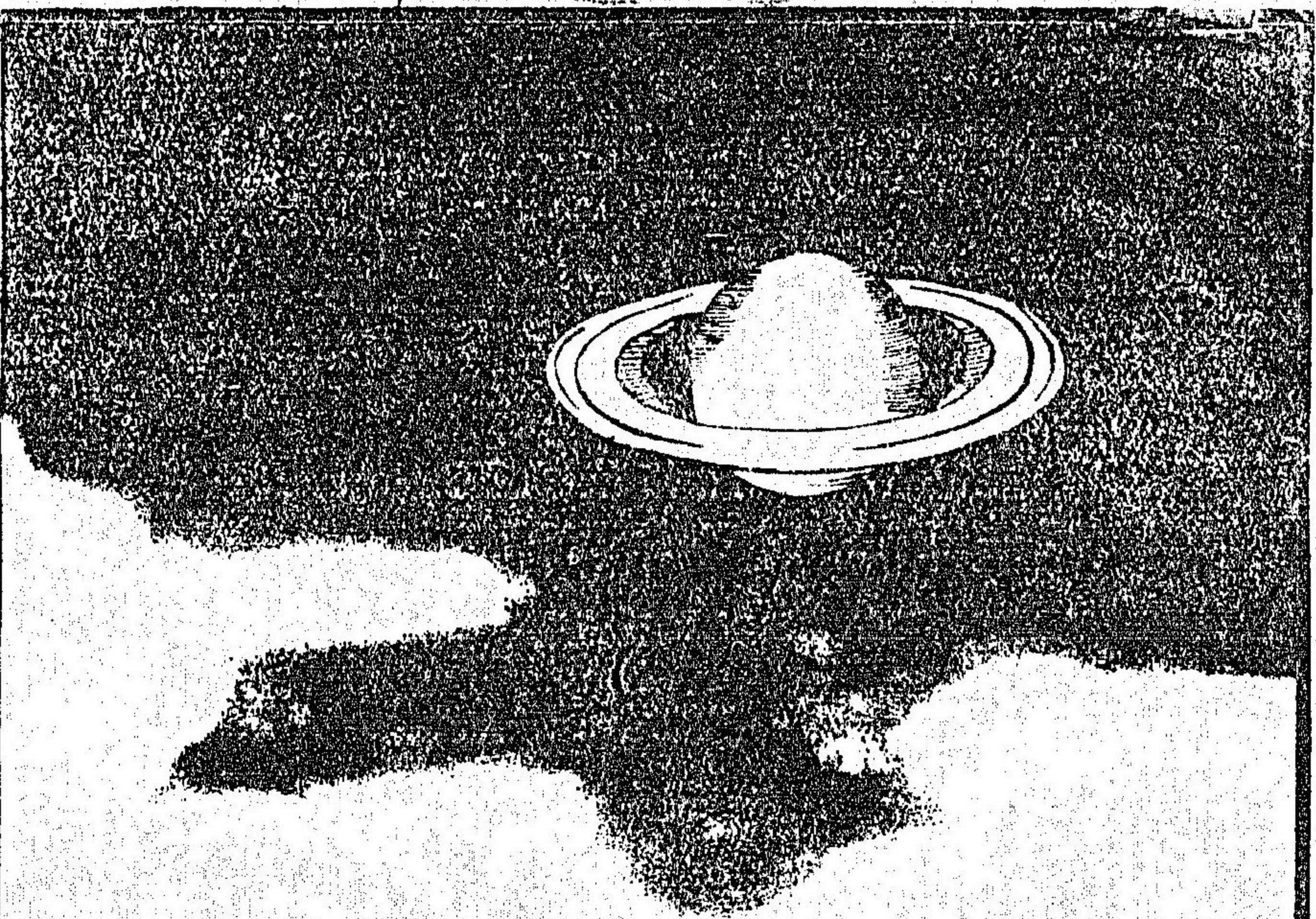
地球ハ太陽系中水星金星の次小位をる一遊星  
小して太陽を距る三千七百二十四萬九千二百  
五十九里其直徑ハ三千二百二十四里一晝夜を  
以て西より東小轉して一晝夜をふし三百六十

大地從來無  
始終循環不  
息自懸空三  
分海水一分  
陸動植生  
是此中。





五日五時四十八秒時を以て太陽を一周し一年  
をなす其軌道ハ楕圓たえんにして地軸ちちくの方向ハ軌道  
の面と二十三度半の交角を爲せり是を以て地  
球の日光を受るの方向常ハ同一ならむ従ひて  
四季の變更を原因を之ハ反して地軸若し軌道  
上ハ正立をる時ハ赤道常ハ太陽ハ對し日光ハ  
常ハ赤道上を直射し歳序成らむ寒暑わらむ  
中帯の國ハ常ハ酷熱南北の國ハ常ハ烈寒をな  
し人畜草木皆其性を得ざる處ハ故ハ地軸の傾  
斜をるハ亦造化の妙と云ふ處し



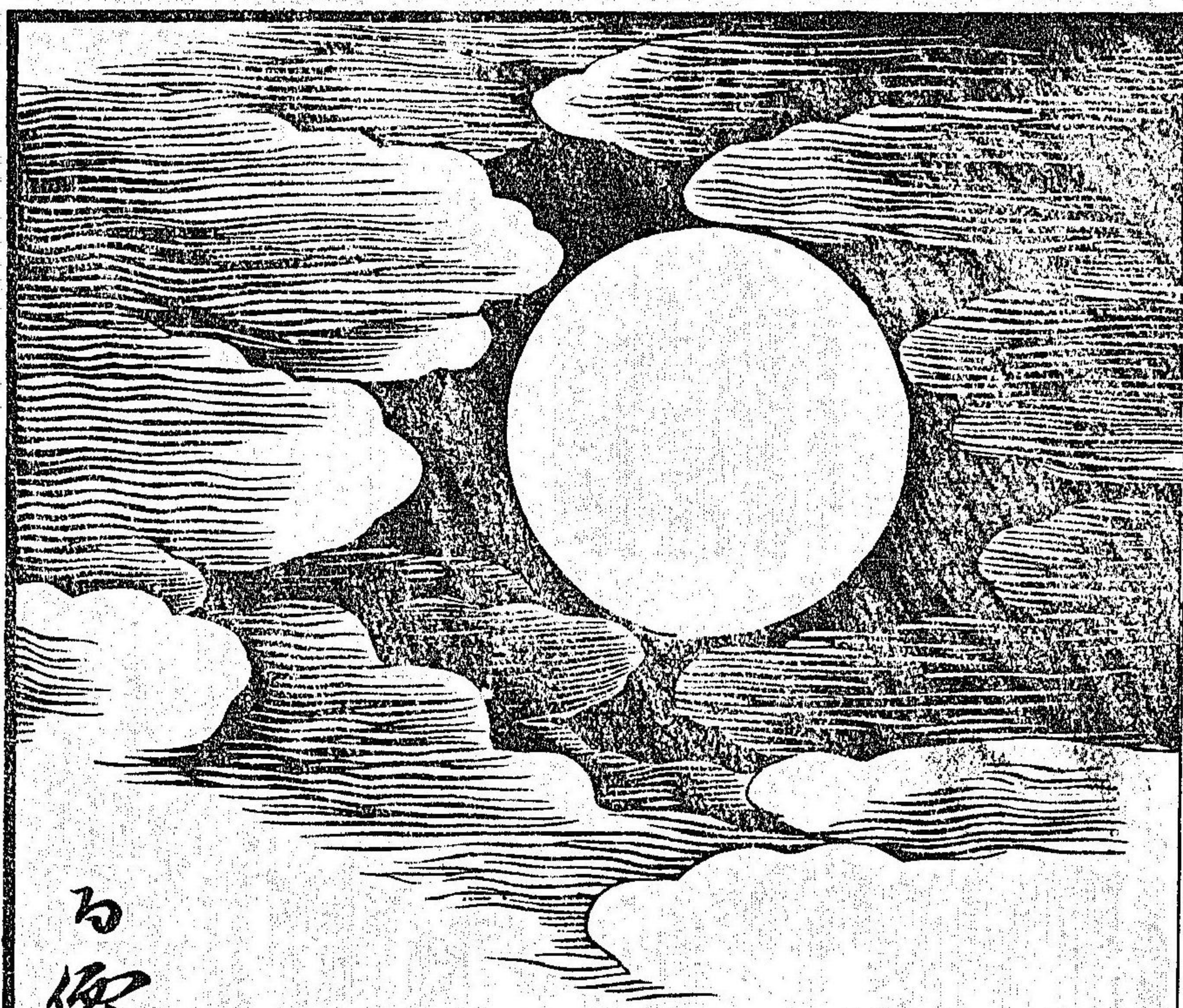
三層堪怪帶光  
環不散消千  
古圖原質料知  
非氣體影光時  
映主星間

土星

土星の直徑ハ太陽を距る三億五千三十一萬四千二百五十九里ふして遊星の中最も奇異なる者ハ土星あり即ち三層の光環を帯び八衛星ありて其周圍を繞り此環や其影主星の上ハ映るること有るを以て氣體ハ非ざる知る處し其形最も奇ありと雖も彼の有名なる佛のラプラチエ氏獨のカント氏の天地開闢説として確實ならまむる一大證左とまきり但し開闢の説ハ茲ハ略す

月

月の體積ハ地球ハ比するハ僅ハ四十九分の一ふして其直徑ハ八百八十一里ふして地球と相距る九萬七千六百九十一里あり汽車の一時ハ能く十二里を行く者として彼を向ひて行かしめバ一年と四ヶ月を以て能く月世界ハ達するを得處し抑月ハ衛星の一ふして地球の周圍を繞り太陽の光りを受て輝く者あり其太陽と地球の間ハ來るや地上の人ハ之を見る能ハざる之を新月と云是を他とし其日光を受たる面の



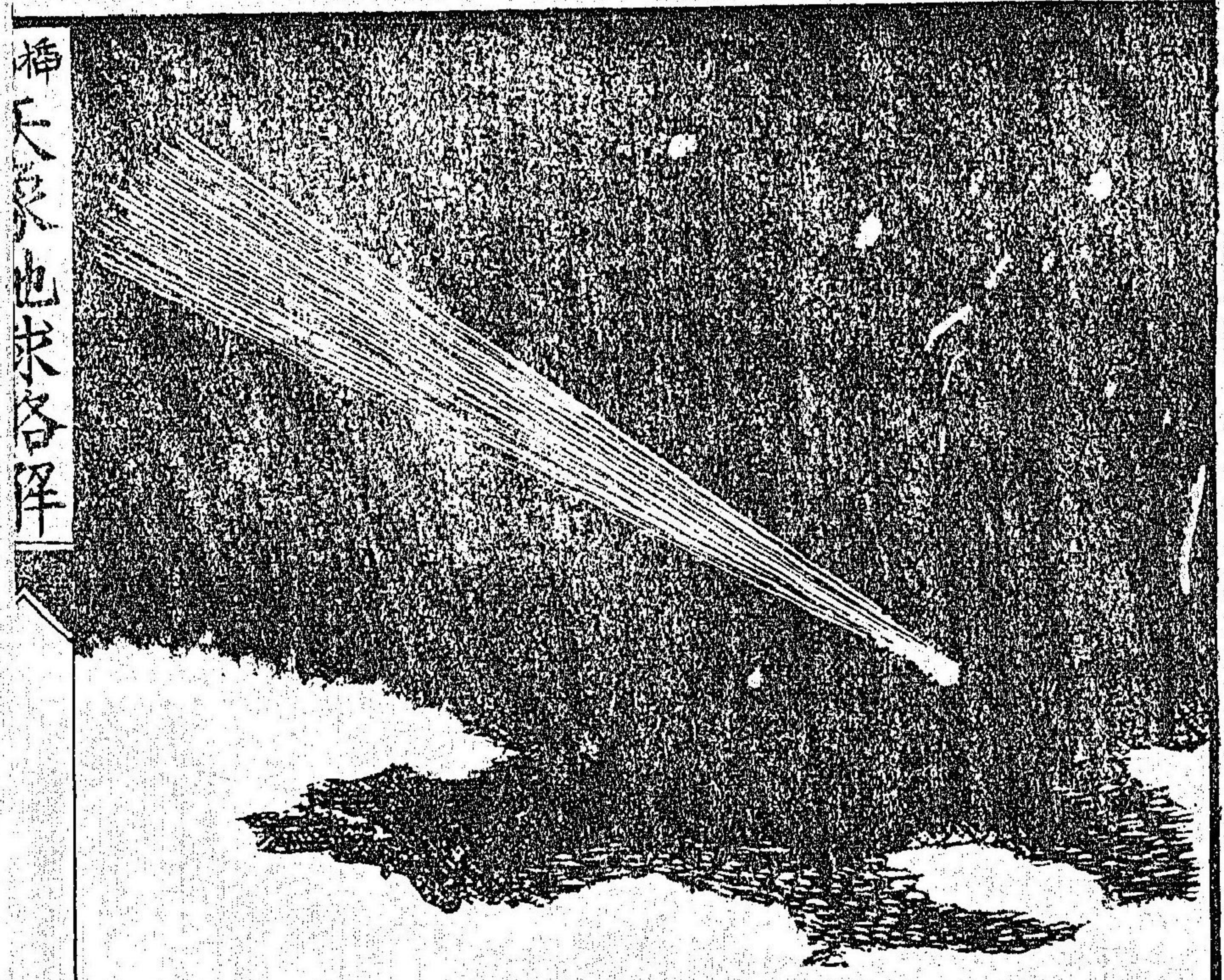
金鏡明懸萬  
里天。一年十  
二缺還圓。海  
潮高引吸收  
力。腐水不生  
皆自然。

る像  
世餘

我小背く小由る此より繞て地球の他の一方小  
來るときハ日光を受たる一面我小正對する故  
小地上の人ハ團團たる月痕グハルを見る處し之と滿  
月とを上弦下弦ハ新月と滿月の中間小在る位  
置小して半輪の月痕を見る處く新月より滿月  
小至るの間小ハ月光漸く小盈ち滿月より新月  
小至るの間小ハ漸く缺く之と月の盈缺エウケツと云ふ  
試小千里鏡小て窺へむ高山深谷の其面小滿ち  
て一大奇觀を呈さ又地上小潮汐あるハ月の引  
力能く海水を引て昇降せしむる小由るあり

彗星

彗星ハ遊星の一種にして長尾を曳き其狀帚頭  
 の如し其現はるゝや常なきが如しと雖も是も  
 亦一定の時期あること遊星の公轉するが如し  
 其軌道の極めて延長せる楕圓形なり數十年小  
 一見する者あり數百年小一見する者あり千餘  
 年小一見する者あり其數も亦甚だ多し古來其  
 出現ハ兵革又ハ飢饉の兆なりとせしハ笑ふ處  
 きの妄誕なり其質稀薄にして能く恒星の光を  
 透竄し星尾小至てハ稀薄愈甚し彗星の中小多



彗星天象地珠圖解

有星如帚亦  
 奇哉諸說紛  
 紛儘可猜願  
 得真誠星學  
 士掃除千古  
 惑塵來

尾を曳く者あり千八百四十四年小現ハ是たる者ハ實ハ六尾を曳きたりと彗星尾ハ皆常ハ太陽の方ハ背き太陽ハ近付くハ從ハ速力漸く加ハリ其速なること驚ク極ク昨日天の一方ハ現ハましこと未だ數日を過ぎざるハ著しく其位置と變むるハ至る

流星

流星ハ空中を遊行する小天體の地球近傍ハ來るとき其引力ハ牽ラる終ハ雰圍氣内ハ墜チ來リ空氣と摩擦して熱を生じ熔融飛散し光尾を

具體天然  
小地球氣  
中衝擊帶  
光流遺蹤  
亦自存真  
證。隕石多  
存五大洲。



後小曳く者あり故小其小なる者ハ空中ハ於て  
其質全く飛散し盡くと雖も大なる者不至てハ  
雷響らいきょうを放ち閃光せんこうを發し往往地上ハ落つること  
ありて其質鐵とニツケルと稱する金屬より成  
り外面一種の黒色を帯ぶ所謂星隕ほしおちて石とな  
るとハ即ち是あり八月十一月の頃小殊小多し

銀河

銀河ハ天ハ一帯の白布を曳きたる如き形象あり  
支那人ハ之を銀河と云ハ歐洲人ハ之を乳街うろが  
と云ふ是を無數の恒星こうせい簇集して成る者あり試

斜劃中天銀色  
長綿延萬里  
亘無疆非  
阿非布又  
非帶即是  
恒星集  
有光



挿天象也求各詳

小絶大の望遠鏡を以て窺へば箇箇其星あることと認むるを得る

### 空氣

空氣の地球を環繞すること恰も卵白の卵黄に於けるが如し之を雰圍氣と云ふ上層に至るに従ひ漸く稀薄となり其高さ大約二十里にして盡くると云ふ是を酸素五分の一窒素五分の四の混合に成り凡そ地上萬物の其中に生活するは恰も魚族の水中に在る如く須臾も相離る處からば空氣一尺立方の重量を算するに大約九

分六分即ち水より輕きこと七百七十三倍なり故に空氣中の者一として其壓迫を受ざるを之を空氣の壓力と云ふ氣中の物の其何たるを問はむ一吋平方の面ごとく十五磅の重量に等しき壓力を受けり今此の壓力を以て水と水銀の重力に比ぶるに長さ二尺六寸許の水銀柱の壓力と三十四尺許の水柱の壓力と平均を彼の晴雨計の水銀の昇て二尺六寸許の高さに至るも唧筒の水を吸上るるに能く三十四尺許の高さに達するに畢竟此の氣壓に由る者なり此例

を以て算をまきば人體の全表面ハ大約十平方尺  
 あるが故に其受くる所の壓力ハ二千五百貫の  
 多きに至る然れども人の之を感ぜざる所以の  
 者ハ體內に空氣あつて相抗し内外平均を得る  
 不あり抑空氣ハ萬物の資て以て生活する最大  
 緊要の者なり世に空氣無きときハ禽獸も皆死  
 せべく草木も皆枯るべし加ふるに火も亦空氣  
 無きときハ燃ゆる能はず聲も亦聞く可からず  
 音聲ハ畢竟空氣の顫動に成り火燃ハ酸素の化  
 力に歸し酸素ハ實に吾人の資て以て生を養ふ

所の者なり一瞬間も缺く處からば新鮮の酸  
 素を吸ふときハ汚血鮮紅に變じ神氣爽快を覺  
 え小室内に多人數相集まる時往往頭痛眩暈を  
 發する者あるハ酸素漸く減じ炭酸の毒に因る  
 者とて炭酸ハ炭素酸素の抱合物にて人常々之  
 と呼出し火の燃ゆる時亦發生を火より炭酸を  
 生じ人亦炭酸を吐くとせむ空氣内にハ漸く炭  
 酸を増し酸素ハ人畜の呼吸ごとく漸く減る處  
 まで理なり造化豈之を知らざらんや人畜炭酸を  
 吐けむ草木之を吸ひ日光の作用を受け之を

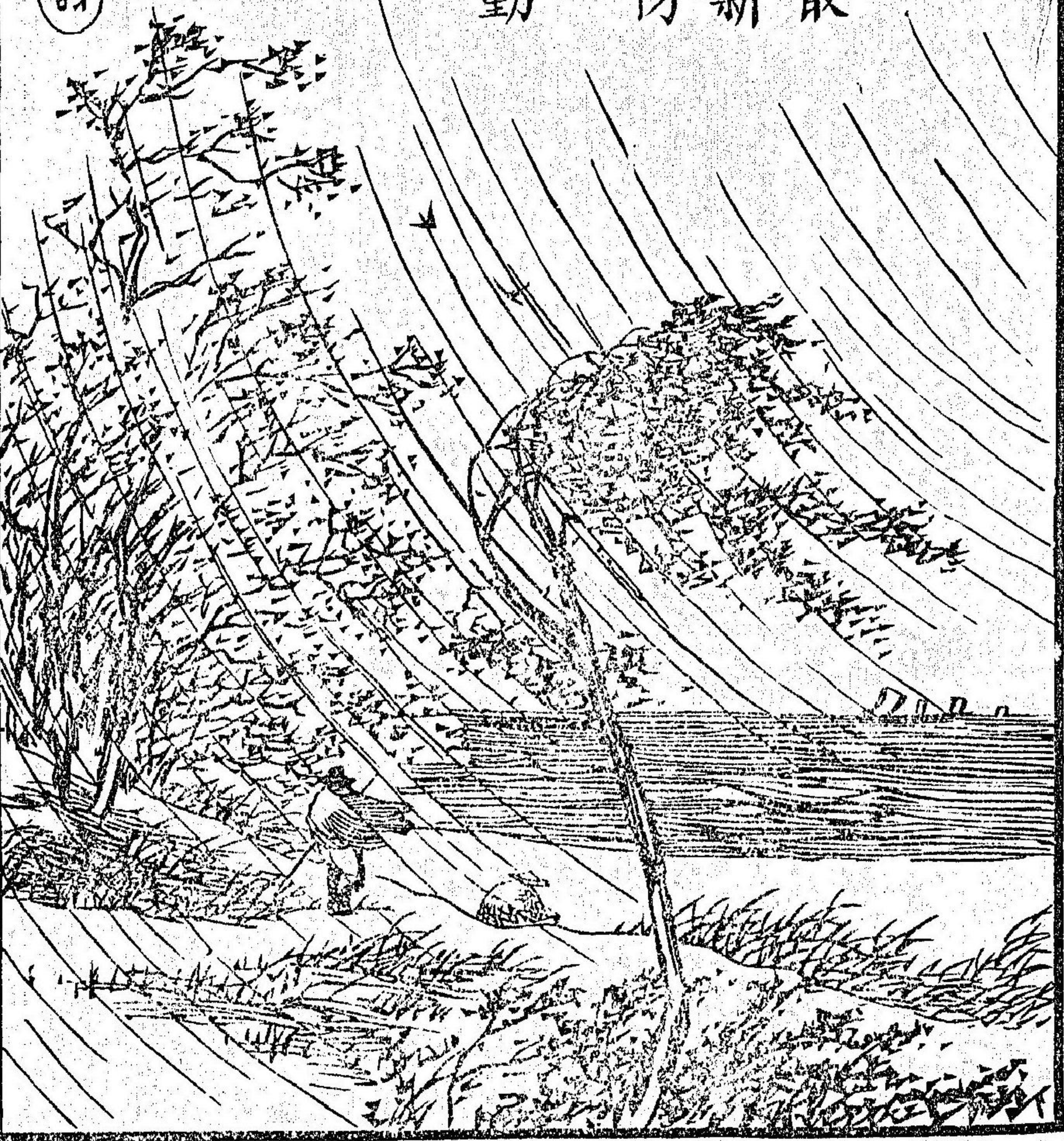


分解し酸素を吐て復た人畜の呼吸を助く酸素と炭酸の互に草木と人畜と養ひ循環盡くる時あることなし化工の用意真に密なりと云ふべし

風

風の空氣の流動あり空氣の固と太陽の熱に因て膨脹するの性あり故に一處の空氣膨脹し輕浮上騰するに至まば其跡を充塞せんとし他方の空氣之に交り來り終る流動を生むるあり故に赤道近傍に恒信風と稱し常に同一の方向

日烘空氣散  
飛中更代新  
陳是此風防  
腐海潮同一  
理循環流動  
悉天工



る像 (世時)

挿天象地求各屏

小吹く風ありて赤道以北の東北の風を去し以南の東南の風を去し其風の東を偏する所以地球の東に向ひて回轉する者あり博物新編の風力の強弱を形容し載せて曰く雨點鐘と一時とし一時ふして六里を行く者人覺らば水雲動らば一時ふして三十里を行く者ハ和暢人ハ宜しく水紋起り烟捲く一時ふして百里を行く者ハ松竹ハ聲あり一時ふして五十里を行く者ハ芙蓉水ハ颯し一時ふして二百里を行く者ハ飛燕斜ハ退く一時ふして二百

五十里を行く者ハ人吹るハ耐へば一時ふして三百里を行く者ハ蓬飛び茅展び帽落ち塵颯る一時ふして四百里を行く者ハ萬竅怒り號び海波瀾澆を一時ふして五百里を行く者ハ船沈み屋爛ま樹抜け椀傾く一時ふして六百里を行く者ハ草木皆摧け鳥獸多く死し砂を飛し石を走らし物ハ完膚ふと但し風の速力ハ地上の雲影ハ據りて之を測ると得る

水

水ハ酸素と水素の化合ふ成り無色透明の流動

水俣

水養生民萬  
古流積成深  
重大舟浮。蒸  
騰強力千餘  
倍。請看登天  
輕氣球。



體こりて熱を受まば化して蒸氣とちり冷こ觸  
るまば凝りて氷塊ひょうまいとちる蓋し動植二物の資たくて以  
て育養を遂ぐる必要物こりて一日も缺く可か  
らざること猶空氣の如し地上こ水なきときハ  
天こ雨露の恩なく地こ井泉の源なく草木人畜  
豈其生を得なけんや唯水有るが爲めこ畜世こ育ま況や近  
小生こ唯水あるが爲めこ人畜世こ育ま況や近  
來文明の利器たる汽車汽船ハ一こ蒸氣の力こ  
成るこ於てをや又彼の空こ駕し飄然ひょうぜん天こ登る  
の風船も亦水素の力こ由るこ非などや水の世こ

益をる擧て數ふ可からば

海

水の大陸の間不在て茫茫天涯と相接する者之  
と海と云ふ地球表面四分の三を占めり別ちて  
五大洋とを乗槎萬里歐米を航する波間一路  
支那を行く船く海濱を煮て鹽を採り港灣を  
載せて百貨を通む北洋を鯨鯢を驅る者あり  
南海を珊瑚と探るものあり其他人世の必用極  
まりなし

滔滔清波四海春

魚鹽益世與時

新他邦貿易

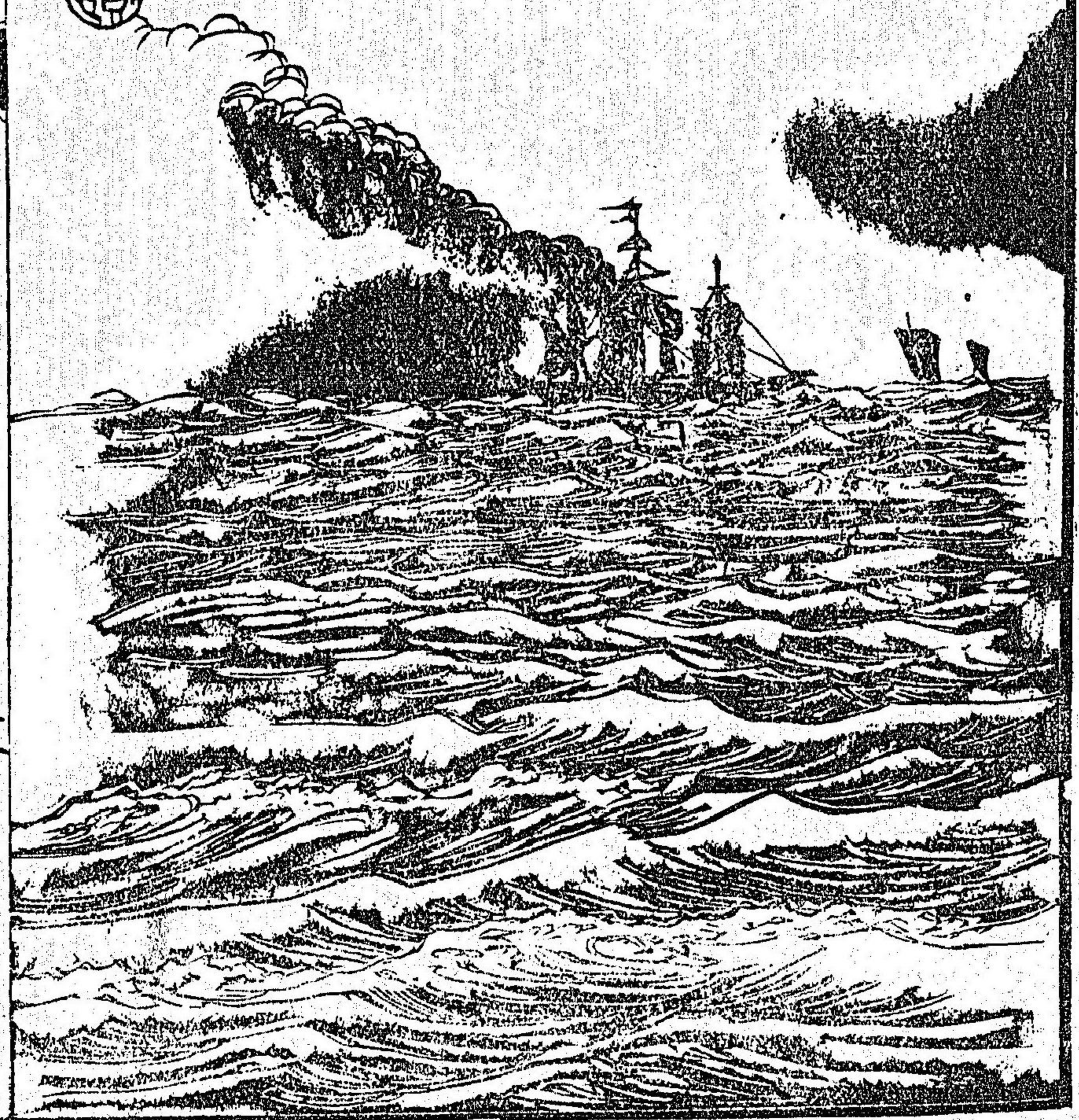
通船利萬

里洋中

是比

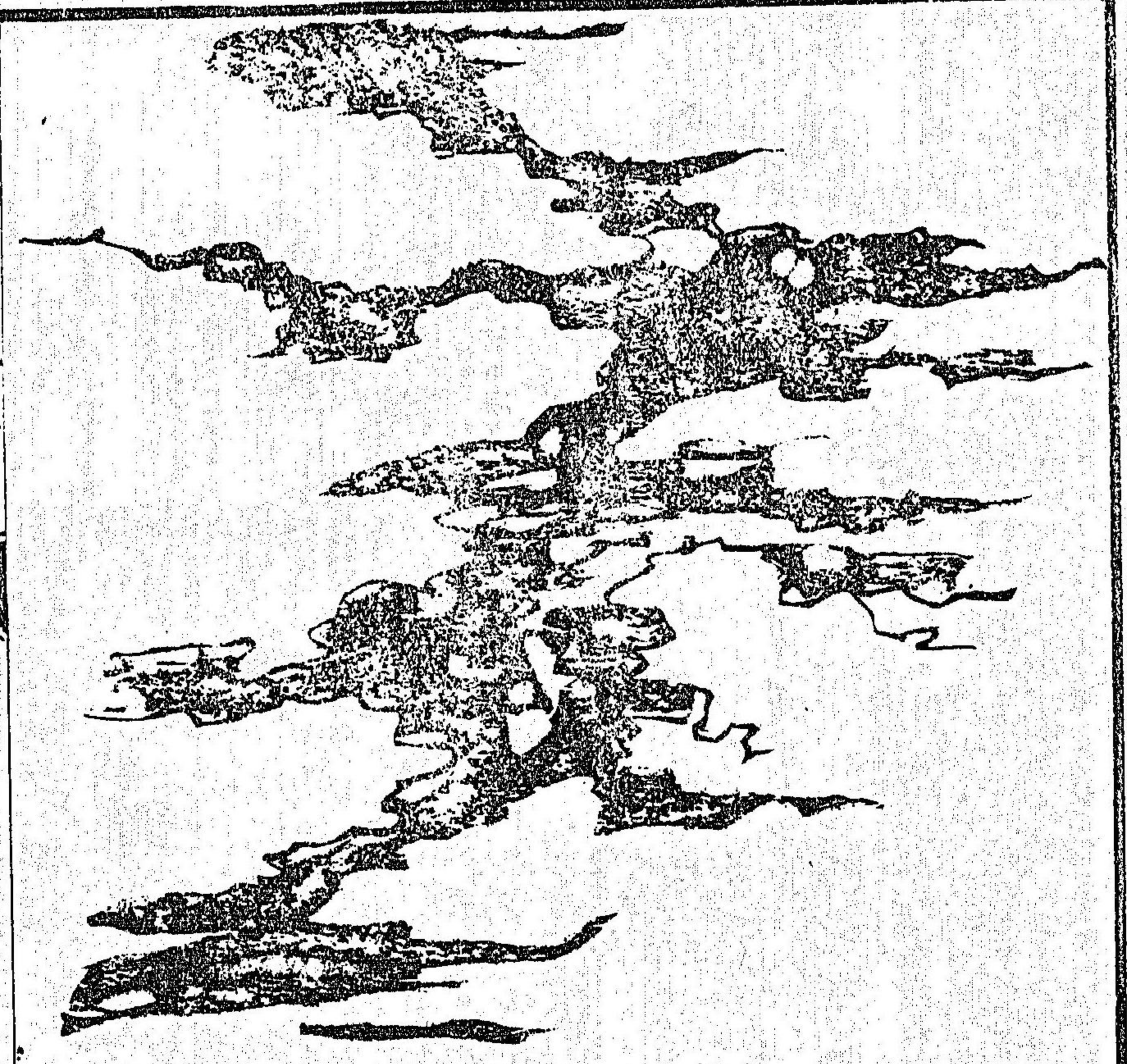
隣

石像の印



雲

雲ハ江河湖海の水氣蒸騰シ冷小遭ふて凝集シ  
 たる者あり喻へて夏時ハ空氣溫暖なるが故小  
 人の氣息ハ見る處からざるも冬日小至まバ空  
 氣寒冷なる小因り呼出さる所の水蒸氣忽ち觸  
 きて凝集シ雲霧の状となすと同一の理あり又  
 雲ハ太陽の映射と水氣の濃淡と小因て數種の  
 色象を現む古來慶雲見ると云ふて漫小喜び  
 妖雲出ると云ふて徒小怖ましが如きは未だ其  
 理を確明せざる小由まり語小曰く天小不測の



大陽熱射海  
 兼山。水氣蒸  
 騰去復還。冷  
 際凝來雲影  
 現。浮遊汎汎  
 蔽空間。

乃像有之(四)

風雲あり人ふ暫時の禍福ありと夫を朝晴暮雨  
變化窮り無き者の天象の常體あり雲影何ぞ人  
身の吉凶禍福ふ關せんや紫たり錦たり紅たる  
ハ大陽の美映白たり黒たるハ水氣凝集の濃淡  
ふ因る何ぞ怪むふ足らんや

雨

雨ハ雲の冷氣ふ遇ひ凝集一層を増し終ふ點滴  
とありて地上ふ降る者あり古人蒸餾器を以て  
水の兩間を循環するの理を示せり即ち大洋ハ  
蒸餾罐あり水氣昇て空中の冷際ふ達し還元滴

晴雨循環無  
始終昇降機  
活是天工。四  
時膏澤甘如  
蜜。動植長憑  
滋養功。



雨

世

化して地上を雨下き地の則受器も等しく冷際  
の則放冷管も等し雨復た江河を流して大洋も  
注ぐ循環して盡きざることを知る處し

氷

氷の水の温を失ひ凍返したる者も其氷化を  
るときは潜温逃出し稍膨脹を致す故に氷の水  
より軽くして能く水上も浮ぶ又其膨脹の勢は  
頗る猛しく巨岩大炮と雖も之を破裂するも至  
る

氷質從來存  
異情十分比  
氷一分輕膨  
脹將結逃温  
素鐵鉢銅瓶  
裂有聲

る像

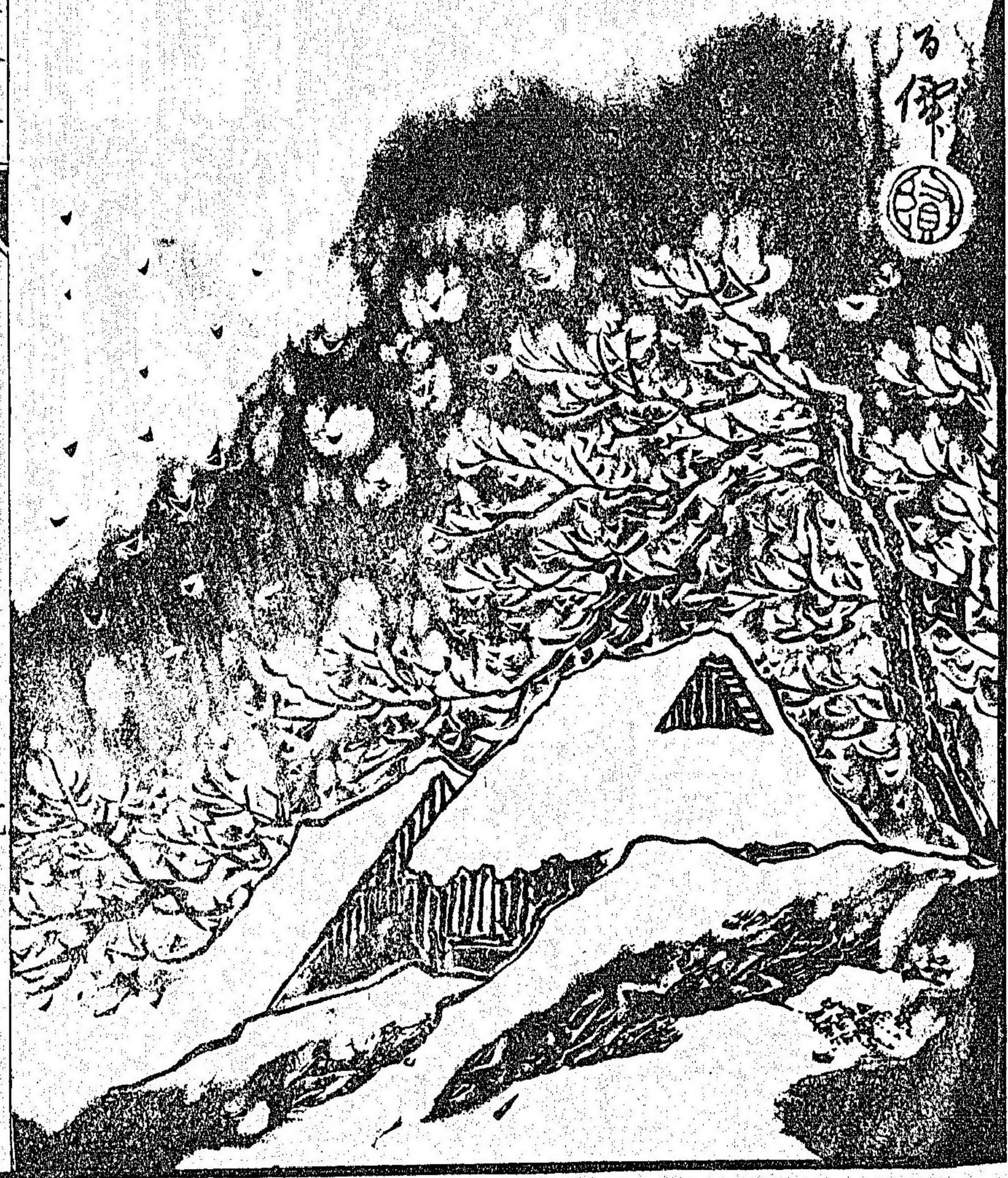
世の



雪

雪ハ水蒸氣の冷際不於て氷化凍結し降る者不  
 して其多く地上不積むや四顧一面の銀世界を  
 爲し干林花を開き萬樹玉を戴き艷美の奇觀を  
 呈と凡そ野菜類の花ハ四葩草木の花ハ多く五  
 葩亦まども雪ハ六片の結晶より成まり故不六  
 出の名あり又俗間不雪ハ歲豐の兆と云ふ蓋し  
 田圃不雪深けまハ害虫の蟄さる者多く死し山  
 谷不積むこと深けまハ泉源久しく盡き冷故不  
 其理不しと云ふ處からば又嚴寒の時と雖も雪

蒸氣衝騰  
 冷際天結  
 晶降處六  
 葩鮮朝來  
 現出浮世  
 夢銀闕瑤  
 臺一樣妍





の降るときは却て寒を減むるハ水蒸氣の凍合  
氷化する際ハ潜温を放散するハ由ること猶雨  
前ハ蒸熱を感むると一般なり

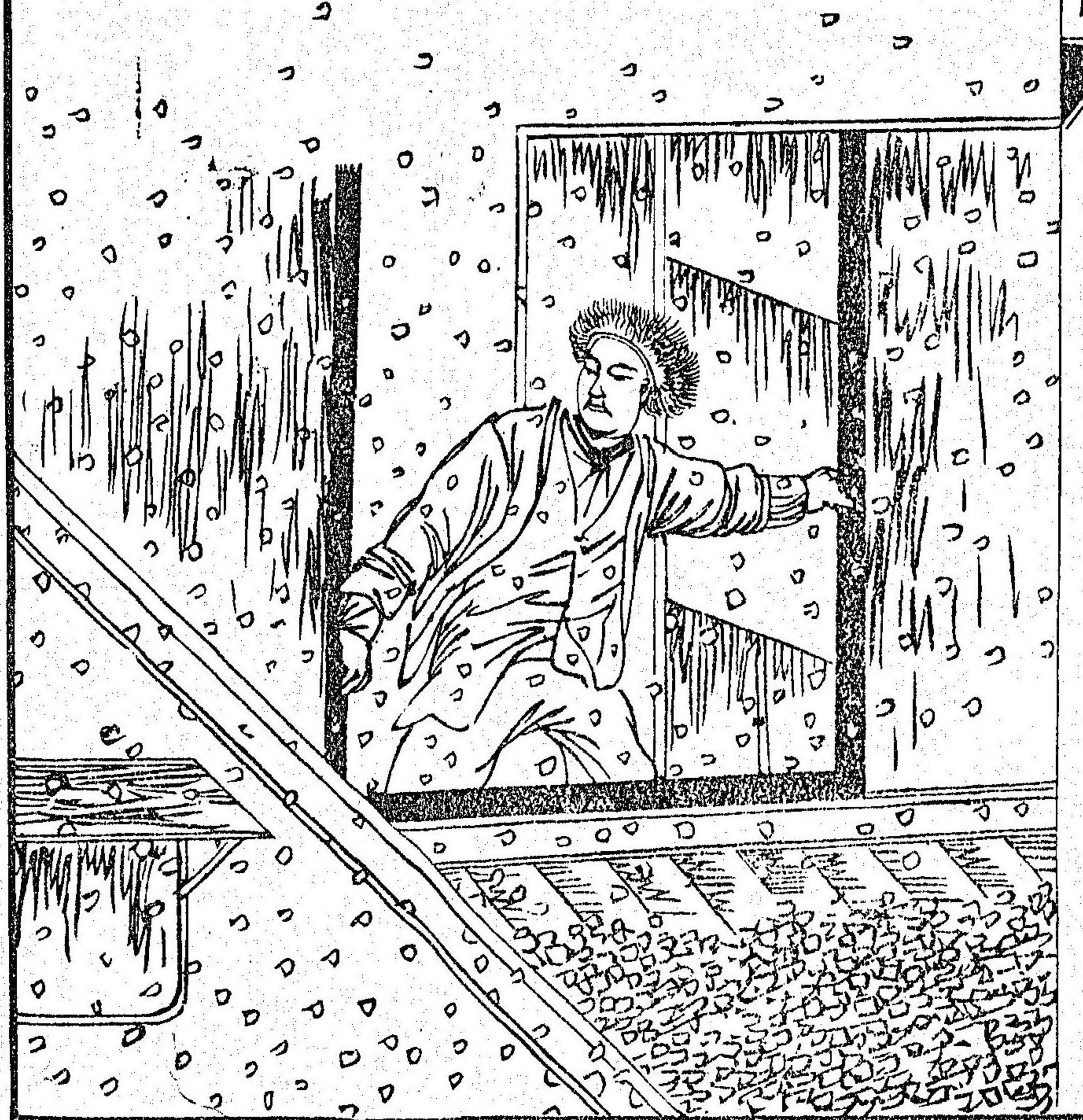
霰 電

霰ハ雪質の小粒ちりハて春ハ多く電まハ内部雪質  
ハて氷衣を被ふり夏日雷雨の前ハ降る者多  
シ蓋ハ是ハ霰の降下する時水氣其外面ハ附着  
シ以て氷衣を爲す者なり又時としてハ鳩卵大  
の者を降らせ又馬頭大の氷塊を降らせことあ  
り往往五穀を害して慘あつ状を極む農家の最も怖おそ

難認彈丸  
雨注蹤雪  
花降處是  
先鋒三間  
板屋書窓  
底臥聽亂  
聲懸古松



雨滴乍凝  
冷際中層  
層氷結下  
遥空玲瓏  
存核人知  
否。即是天  
公兩度工。



るゝ所の者あり

露

露ハ空中の水氣夜間放冷せし物ハ觸を滴  
化凝集して成りし者あり故ハ天晴きて地  
上の物體其温を失ふこと愈多けきハ露華  
を結ぶこと従ひて多く雲ありて地を蔽ふ  
ときハ地上の物體温を失ハざるガ故ハ露  
を生むること少き



蒸氣每宵逢冷圓。  
朝來愛見露華鮮。  
千花萬草吐珠玉。  
恰似爛然星列天。

百僂齒

世韵

百僂齒

世韵

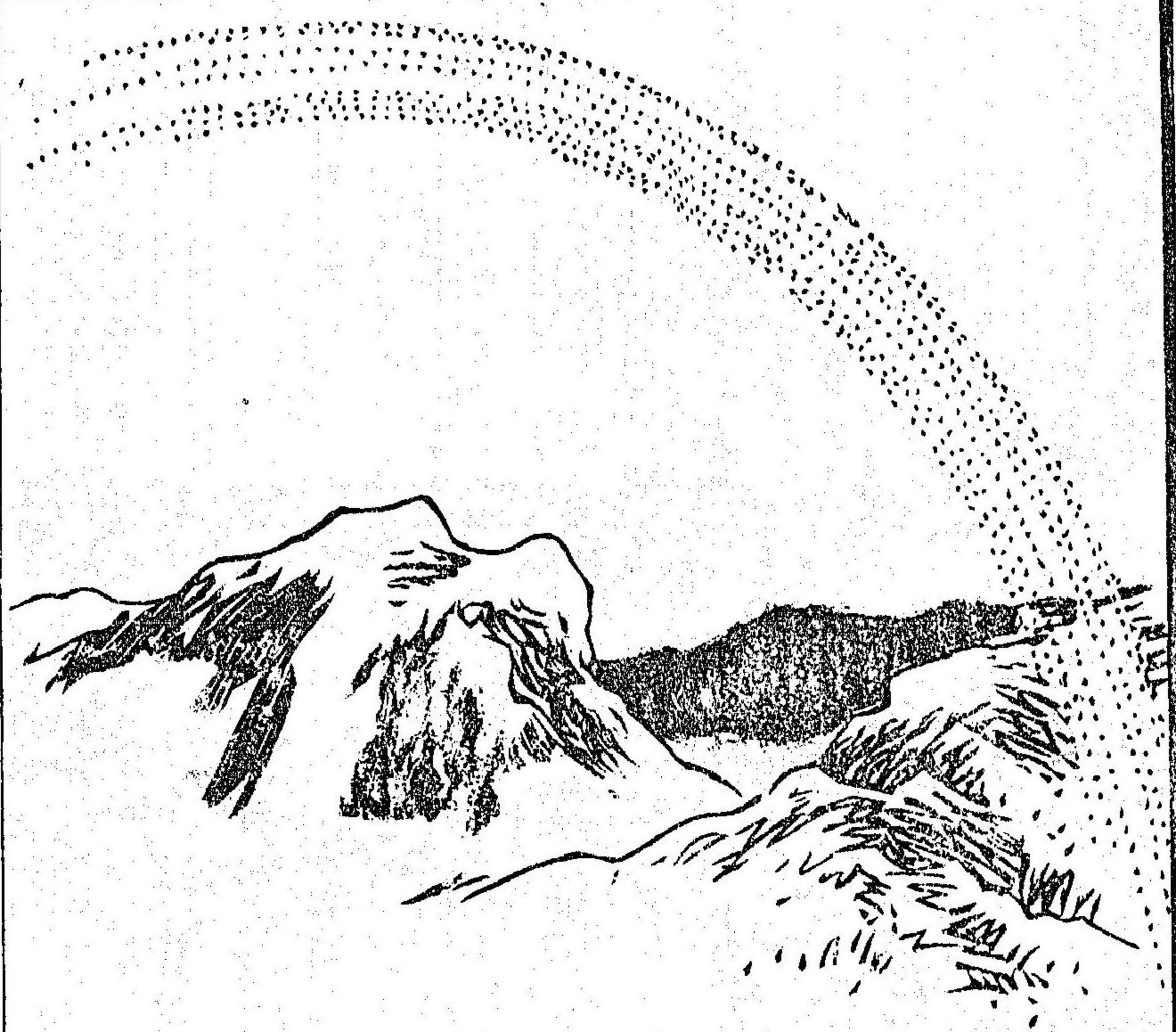
秋氣凜然肌粟頻。  
萬林飄落足愴神。  
濃霜一面布銀色。  
恰似晴空微雪晨。



霜

霜ハ露の一層寒冷ニ遇ヒテ結晶シたる者  
ニ外ホラズ故ニ温度氷點下ニ下るの夜ニ  
非ズキハ結ビざるホリ抑露たり霜たり皆  
日ニ照さるゝときハ忽チ消え露ハ風ニ逢  
ふときハ忽チ飛散シテ長留ヲ期セズカラ  
ズ故人曰ク功名ハ花上の露富貴ハ草頭の  
霜ト至言ト云ふ處シ

虹霓



る偉

世の

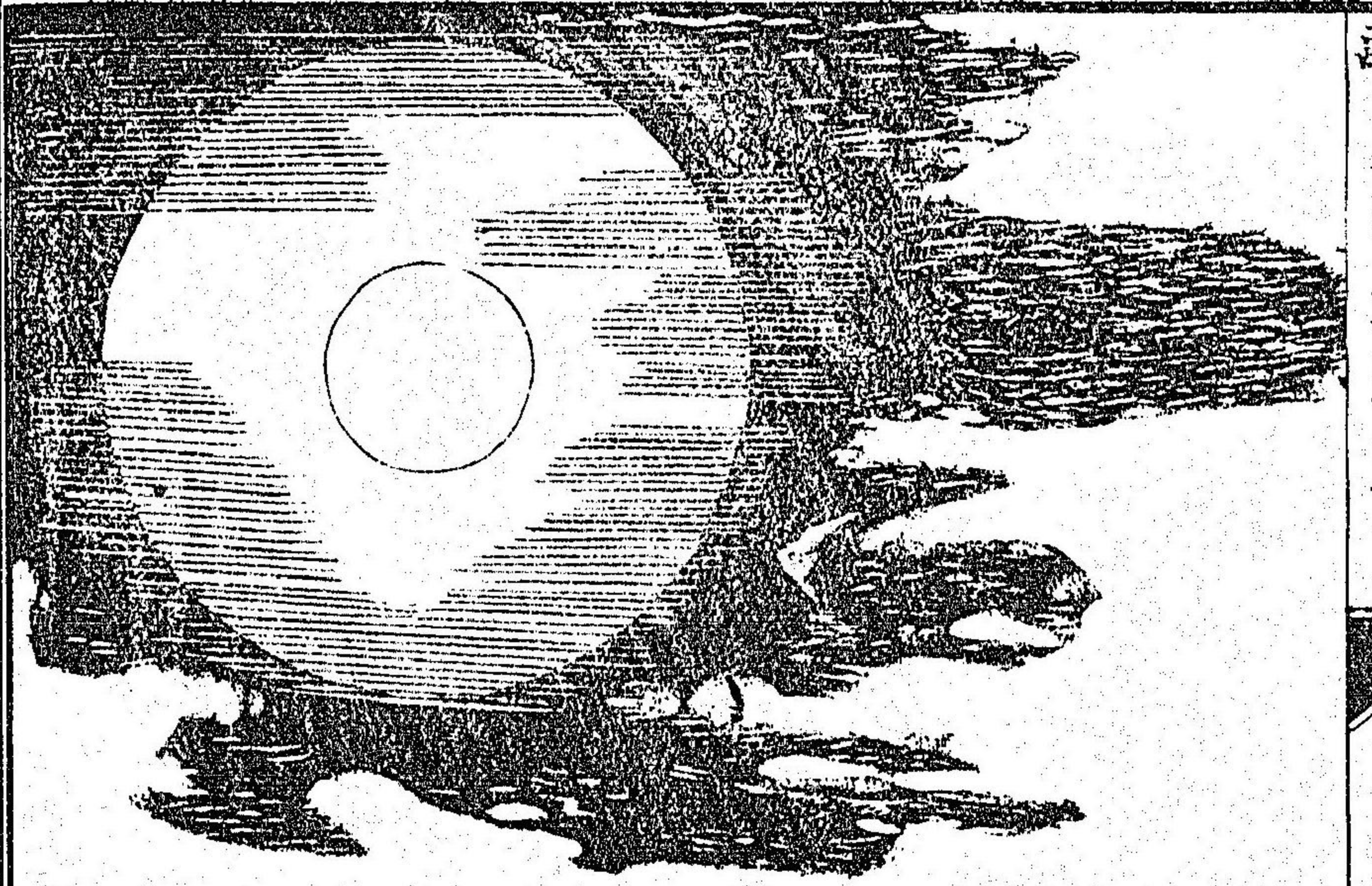
水氣懸空濕  
不消半晴半  
雨夕將朝紅  
輪返射生虹  
處恰似天邊  
架彩橋

虹霓ハ前小雲ありて雨を降らし後小太陽の輝  
く時小現ハるゝ者あり故小朝虹ハ必ヒ西小現  
ハる夕虹ハ必ヒ東天小映ヒ蓋し是レ日光雨滴  
の中小入り反射屈折して赤、柑、黄、緑、青、藍、紫の七  
色小分解し人の眼小入り來る小因る試小太陽  
小背き空中小水を噴ケけバ忽ち虹彩の眼を遮ル  
と認むニ濤ノく瀑布ノの下小立つとき日光水烟を照  
せば空中小小虹ノ圈ヲを認むることあり共小其理  
の一あるを知る小足る又虹の色鮮明あるとき  
ハ虹の上小更小第二の虹を現ハシ其七色の順

序ハ前者小反せり即ち第一の虹ハ赤色外部を  
占め紫色内部小在りと雖も第二の虹小至てハ  
全く之小反せり但し朝虹ハ雨の兆小して夕虹  
ハ晴の兆小り

暈

暈ハ空際小水氣曇翳ヲをホまスとき日光又ハ月光  
と受て生むる者小て日暈と月暈とあり恰も全  
圓の虹影を見るが如し然レも七色常小淡ク  
として分明あらむ俗小日月の傘と云ふハ其形  
の相類をる小因る



蒸騰濕氣滿乾坤。  
日月明邊生暈痕。  
巨傘開來如有意。  
料知降雨在朝昏。

電 雷

是を電氣と稱する一種の自然力より起る者も  
して電氣も陰陽の二種あり夏天も二雲相離る  
一は陽電氣と集積し一は陰電氣と集積し其間  
空氣ありて之を隔つと雖も二氣の力大あると  
きハ互も相通して平均中和するも至る電ハ則  
ち此際も起る火光もして雷ハ則ち其爲めも生  
むる空氣の激動あり元來電と雷とハ一閃一聲  
同時も發し彼此も前後の別なくと雖も光の速  
力ハ一秒時も凡そ八萬四千里を行き響の速力

飛光迅發  
閃乾坤。即  
是陰陽衝  
擊痕。傳信  
之機。通萬  
里。可知電  
氣有根原。

白  
儼  
世  
的



霹靂震天  
山嶽轟轟  
狂鳴貫  
耳實堪  
驚。試  
思這  
裡存  
何理。  
電氣  
陰陽  
衝擊  
聲。

插天象也求各解



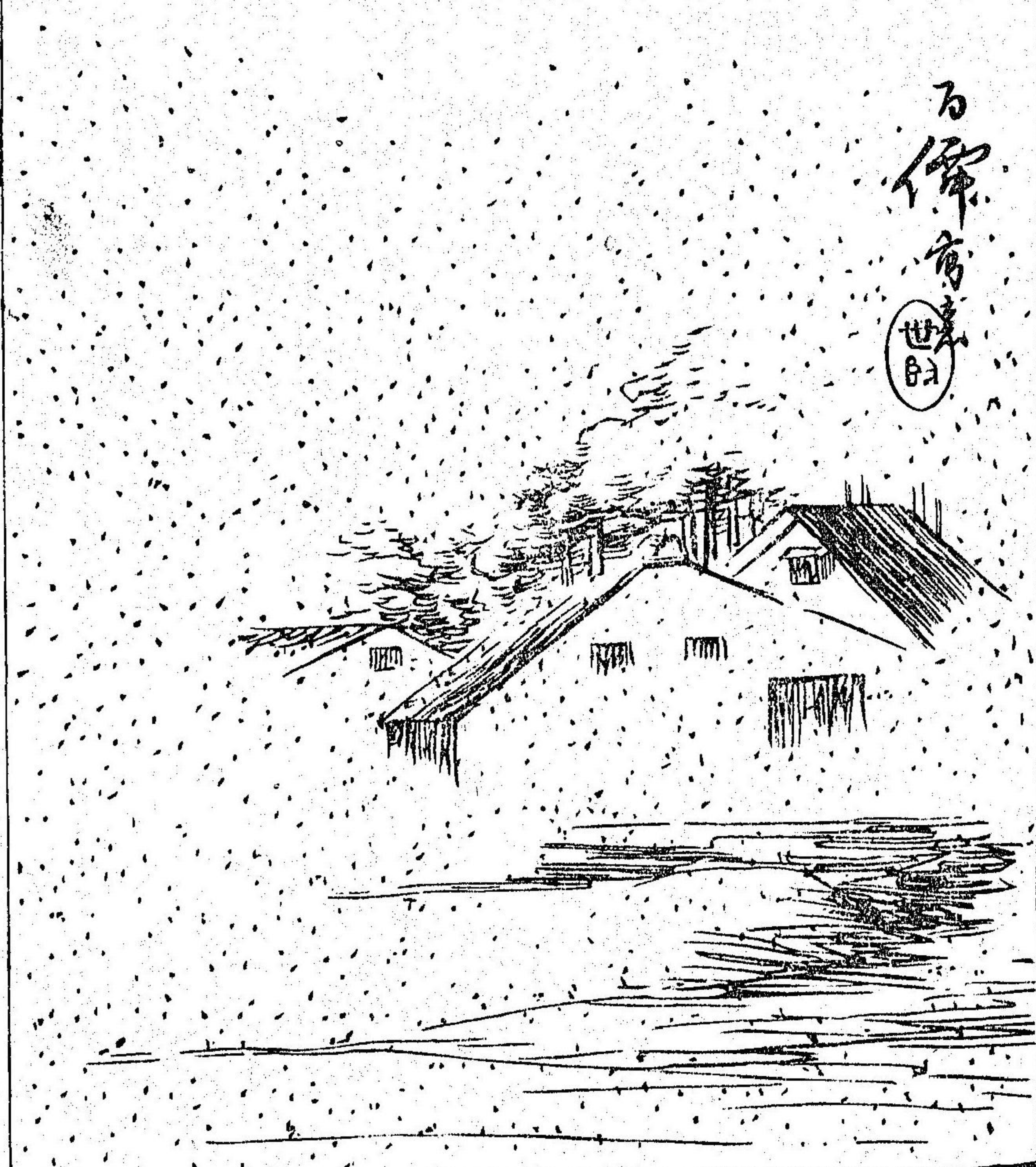
共

ハ一秒時纔小千百尺を傳ふる小過ぎば其速力  
小殆んど九十萬倍の差ありと以故小眼既小紫  
電の發するを見るも耳未だ雷の轟轟を聽かさ  
ることあり雷雲の我を距ること愈遠けまバ雷  
聲の耳小達すること漸く遅く愈遠くして愈遅  
く終小電光を見ると雖も雷鳴を聞かざること  
あり彼の俗小稻妻と呼ぶ者是なり又雷の轟轟  
たるハ山谷雲層小激する反響あり故小平原小  
在てハ雷聲も短く山間小在てハ殊小長し

霧

濛濛濃  
霧蔽山  
川水韻  
松聲響  
四邊俄  
頃乾坤  
晴又現  
似持萬  
象吐吞  
權

る像  
世の

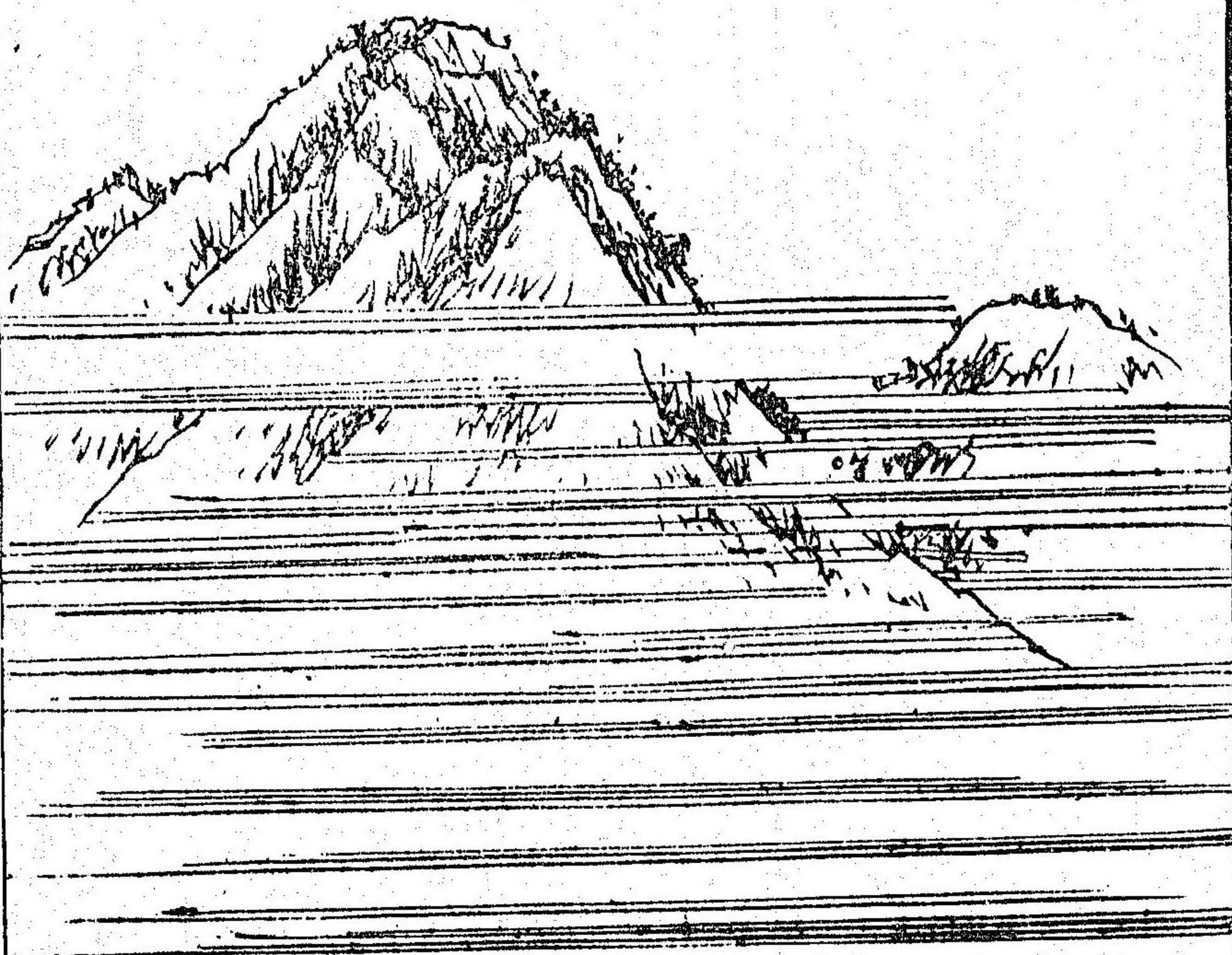




霧ハ雲と同物小一て唯高低小よりて名を  
異小するのみ高く摇曳する者之と雲と云  
ひ低く朦朧たる者之と霧と云ふ故小山家  
の人霧を出で下て麓小來り頭を回らせバ  
白雲の山嶺小横ハるを見ることあり

霞

霞ハ雲霧の横抹一て日光小色を借る者  
り春日小多し



地温蒸出  
水中精抹  
抹霞光天  
半横濃淡  
深成千嶂  
美。是真是  
画不分明。

る偉古人有志 (世田)

挿画 天象地球略解終

附録

一日蝕ハ月體が日と地球との中間と遮るゝ起  
 り月蝕ハ地球が日光と遮りて月體ハ映徹せ  
 ざるハ因る而して其蝕ハ淺深の差異あるハ  
 其見る處の地方ハ就き交互相對する距離の  
 正斜多少ハ關するハ由るあり

一博物新編ハ最も日ハ近き者と水星ト一其次  
 と金星とし其次を地球とし其次を火星とし  
 其次を喊士<sup>エス</sup><sub>ス</sub><sup>ラ</sup>小星とし次を噁厘士<sup>ニ</sup>小星とし  
 次を啤拉士<sup>バ</sup>小星とし次を珠那<sup>ガ</sup>小星とし次を

木星次を土星次を子彗星是れ日を離るゝ最も遠しとす日輪常々其中に居り十餘星次第小圍繞して之を行くる實は日輪を以て樞紐の位とす中畧天文家の言は日ハ地より大なる一百三十萬倍地ハ水星より大なる十四倍地ハ金星より大なる少許地ハ火星より大なる三倍土星ハ地より大なる一千倍木星ハ至大にして地より大なる一千四百倍彗星ハ地より大なる八十倍なりと曰へり

一地球説畧ハ地球ハ六大洲あり曰く亞細亞曰く歐羅巴曰く亞非利加此の三洲地相連屬す又一洲あり曰く澳大利亞共ハ四洲とす俱ハ地球の東半ハあり曰く北亞美理駕曰く南亞美理駕此の二洲ハ俱ハ地球の西半ハあり六大洲の内最も大なる者ハ亞細亞之ハ次ハ亞非利加と北亞美理駕と相同し又之ハ次ハ南亞美理駕又之ハ次ハ歐羅巴其最も小なる者ハ澳大利亞なりと曰へり

纂述者追録

日本新報

附錄終

明治二十年二月十八日御届

全 年七月出版

定價金三拾錢

纂述兼  
出版人

京都府士族

增山守正

東京神田區駿河臺鈴木町  
十六番地寄留

發賣所

靜香園  
右同所

